スモールグループ

戸坂聖書教会　　松原洋満　　2017 年 6 月

はじめに

　私は神学校のクラスでスモールグループ形式を用いていました。その感想を学生に尋ねてみたところ・・・

・多様な意見が聞けた
・新しいアイデアが出る
・視野が広がる
・考えがまとまりやすい
・自分の意見の確認ができる
・ホンネが出やすい
・眠くならない
・考えざるを得ない
・楽しい
・相互理解ができる

といった、感想がでました。

　スモールグループは単なる形式ではなく、深い意図と効果があります。このノートを利用してくださって、スモールグループがさらに適切で効果的に用いられることを願っています。

目　次

Ⅰ．スモールグループの歴史

Ⅱ．スモールグループの根拠
　１．神学的根拠
　２．社会学的根拠

Ⅲ．スモールグループの利点
　１．個人的利点
　２．集団的利点

Ⅳ．スモールグループの種類
　１．コンタクトグループ
　２．伝道グループ
　３．養育グループ
　４．成長グループ
　５．サポートグループ
　６．サービス／ミッショングループ
　７．サテライト

Ⅴ．グループリーダーシップ
　１．リーダーシップスタイル
　２．リーダーシップシステム
　３．リーダーシップ機能
　４．スモールグループミニストリーに必要なリーダーシップ
　５．トレーニング方法

Ⅵ．グループダイナミックス
　１．自己開示とコミュニケーション
　２．規範（ノーム）と役割
　３．規模
　４．ステージ
　５．評価

Ⅶ．スモールグループによる聖書研究
　１．めざすもの
　２．個人での準備
　３．グループ
　４．リーダー

５．セッション
６．スモールグループのデザイン、７つの基本要素
７．配置
８．タイミング
９．リーダーシップスタイル
10. 雰囲気、風土

文　献

Ⅰ．スモールグループの歴史

教会史の中で、教会をあるべき姿に戻そうとする試みとして、スモールグループはよく用いられてきました。たとえば、ワルデンシアン（宗教改革の先駆者）、アナバプテスト（家庭に集まって、信仰を実践しました）、敬虔派、モラビアン（世界宣教のヴィジョンを与えました）、ウェスレー（教室でスモールグループを用い、互いに責任を持ち合うこと、支えることを促進しました）。

グループ・ダイナミックスの父と言われるのは、1930 年代にアメリカに来たプロシア人の Kurt Lewin。1946 年に MIT にグループ・ダイナミックスの研究所を作りました。その成果を 1950 年代から、グループにおける効果的な聖書研究などに教会でも用い始めました。InterVarsity、Campus Crusade、Navigators などの超教派団体が積極的に取り入れました。

アメリカでの 1960 年代は、社会問題に関心が向けられ、教会でのスモールグループも個人や世界の刷新に焦点が移りました。1970 年代は自己に関心が向けられるようになりました。成長は内観と人格特徴を自覚することによって促進されるとみなされました。Carl Rogers 、その他の影響がこの傾向を促進しました。スモールグループは「このグループの中で私に何が起こっているか」が主要な焦点になりました。1960 年代から 70 年代の初めは、スモールグループは教会組織の外でおこなわれました。しばしば、教会組織に反対するものでした。

1980 年代は統合の時代。以前の 3 つの焦点であった、聖書研究、社会運動、個人の成長がバランスよく統合されていきました。1970 年代後半から 80 年代は、スモールグループは教会組織の一部、あるいは中心になりました。スモールグループを促進する組織や専門家がたくさん現れました。

Lyman Coleman が教会のスモールグループ用の教材を開発した開拓者です。Serendipity を始めました。その影響と教会成長運動がスモールグループの発展を強力に推し進めました。フラーの教会成長研究所とアメリカン・インスティチュート・オブ・教会成長は、スモールグループを伝道と信徒を用いる方法として採用しました。ステファン・ミニストリーズはスモールグループをケアするセンターとして活用しました。チョー・ヨンギは宣教と成長のために家の教会を用いました。フラー神学校の Roberta Hestenes とゴードン・コンウェル神学校の Richard Peace はグループ発達のための組織と原理を教え始めました。

ローマカソリックにおいては、The Base Communities が南米で増え、ブラジルだけでも 8 万以上ありました。Leonardo Boff のような推進役がいました。解放の神学の中の信徒中心グループ。貧しい人と正義の問題に取り組みました。中国では迫害下、家の教会が増えています。イギリスやスコットランドでは、第二次大戦後、家の教会の運動が始まりました。中央アフリカや東ヨーロッパでもスモールグループの運動が盛んです。

今日、スモールグループはよく受け入れられています。その理由は、まず、地域社会の共同体がなくなってきたことです。核家族が増え、親兄弟との距離は遠くなってきました。離婚や家庭内の問題が増え、人間関係が不安定になってきました。地域社会のつながりも弱くなり、職場での人間関係も希薄になってきました。こういった状況が、孤独を生み出し、安全で、個人的に知り合える集団を求めさせています。また、継続教育の人気が高まり、スモールグループにおける学習も魅力があります。同じ問題をかかえた人たちのサポートグループも人気があります。スモールグループミニストリーで共同体をつくろうという期は熟しています。

Ⅱ．スモールグループの根拠

１．神学的根拠
・人格的交わりを持っておられる三位一体なる神が、ご自分のイメージに人間を創造されました。それで、人間も人格的交わりを求める者として造られています。人の心には他の人と関係を持ち、所属したいという欲求があります。
・神は人を男と女に創造されました。創世記 2:18 ; 21-24
・イエス･キリストが受肉して人間の中に来られました。イエスは交わりの中で生きられました。私たちは人生の中でイエスと出会うことが期待されています。ヨハネ 17:11
・互いに愛し合うことによって、イエスの弟子であると認められます。ヨハネ 13:35
・万人祭司を経験できます。
・教会はキリストの体です。ローマ 12:4-5

２．社会学的証拠
・困難に耐え、助け合います。箴言 4:9-10
・自分自身を愛するように隣人を愛することを実践できます。レビ 19:18
・互いの重荷を負い合うことができます。ガラテヤ 6:2
・交わりは、傷をいやし、困難に耐えさせ、重要な決断の助けをなし、霊的成長に欠かせない責任を負い合うことが可能になります。

Ⅲ．スモールグループの利点

１．個人的利点

①受容と配慮により、希望をもたらす
　心理学的に健康な状態であるには、他の人々の存在が必要です。他の人から切り離されると、孤独や孤立の有害な影響を受けます。愛されていることを感じると、生きがいを感じられます。自分が誰かにとって大切であると知ることは、人生の意味と目的を与えてくれます。
　今日のスモールグループは、ストレスで疲れた人たちの休み場です。教会は受け入れ、ケアする所ですが、実際はスモールグループにおいてそのことが実現されることが多いのです。特にサポートグループ（離婚からの回復、虐待、不治の病、薬物依存、働き過ぎなど）は、受容と実際的助けを与えてくれて人気があります。

②信頼と愛を学べる
　信頼と愛を学ぶには、私たちは他の人の人生に深く関わらなくてはなりません。このような関係をつくるには自分自身を分かち合う必要があります。親しい関係を築くには時間がかかり、一度に多くの人とは築けません。したがって、教会はスモールグループの構造へと向かわざるを得ないのです。
　私たちのアイデンティティと自分に価値がある感覚（自尊心）は、私たちが他の人から受けるフィードバックによって影響を受けます。人がグループに所属するのは、自分の態度、意見、信念を確認

したいためであるという研究結果もあります。

多くの人は他の人が自分と同じ痛みを経験し、それから回復できることを確かめたくてグループに参加します。同種の痛みを経験した人がいると、今そのことに苦しんでいる人は安心できます。サポートグループやリカバリーグループは、伝道者の書 4:9-12 の真理を実行しています。

伝道者の書 4:9–12「ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなろう。もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。」

③人が変わる

よいスモールグループは、自尊心、グループに貢献するという自信、所属感を増加させます。スモールグループは、変化への安全で親密な環境を提供します。人は単に情報を受け取ることでは、ほとんど変わりません。スモールグループの中で、ディスカションや話し合いによる意思決定をすることにより、人は変化を促されます。なぜなら、自分が積極的に関わることによって情報を価値判断し、自分の立場を決めていくからです。

サポートグループやリカバリーグループは、人が新しい行動パターンを形成することを助ける手段であることが証明されています。自由に自己を表すことが、失望の中でも進んでいける自由と励ましをもたらします。他の人から受ける励ましと支持によって、困難な状況に立ち向かうように励まされます。困難な状況は新たなレベルの成長や従順を要求します。ほとんどのプログラムにおいて、グループとして目標を達成することを要求されます。支えてくれるグループに参加している期間に、多くの人は霊的に成長します。

④賜物を認める

グループの中で互いに見ていると、一人一人の賜物がよくわかってきます。その賜物はキリストの体への神からのギフトであり、その意識が個人に価値と宣教の意識を高めます。

⑤積極的に奉仕する

賜物が与えられているという自信から、神が互いに仕え合うように召しておられ、イエスのすばらしさを世界に現していこうという意識が生じます。スモールグループに参加することによって、メンバーにはミニストリーの意識が高まります。そのことが、教会全体の成長にもつながります。

⑥み言葉を実践する

コミュニティーに加わっていることは、キリストの性質を現すだけでなく、キリストの命令を行う機会も与えられます。スモールグループは、み言葉を実践する上での、励ましとサポートを与えます。

⑦模範を示したり、見たりできる

スモールグループのメンバーは、クリスチャンとしてどのように聖書的に生きたらよいのかのモデルを身近なところで示してくれます。

２．集団的利点

①個人では不可能なことが可能になる

グループで集まることによって、私たちは個人では困難であったり、不可能であることを達成することができます。キリストの体は共同体であることによって、個人よりもはるかに効果的にミニストリーをおこなうことができます。賜物が相互に補い合ったり、多くの人に相談できたり、声と力を結集したりして、ミニストリーを計画し実行したり、洞察の新しい深みに達したりできます。

パウロはローマ 12 章で、キリストの体のすべてのメンバーは、相互に依存し、尊敬することを語っています。ペテロとヨハネが宗教的指導者たちから脅された時、大胆に語れるように仲間に支持を求めました（使徒 4:23-31）。

②メンバーをととのえる

スモールグループは、メンバーがミニストリーの働きをするために備える助けをしてくれます。時には、聖書研究、カウンセリング、伝道などのスキルを意図的に身につけることができます。また多くの場合には、グループに参加したり観察することによってスキルを身につけることができます。

個人個人に注意が向けられ、相互の関わりが持てるスモールグループは理想的な整える場です。あるいは、ただグループに参加し、見ていることでも多くのことを学べます。互いに愛し合うこと、話を聞き、コミュミケートすること、どうやって不一致や摩擦に対処するかなどを学べます。

③伝道と弟子化

まだクリスチャンでない人がスモールグループに参加した場合、彼らはメンバーが言っていることとやっていることとの一貫性を観察しています。メンバーの信じていることの真実性に確信が持てれば、自分も同じ信仰を持ちたいと思うでしょう。使徒の働きでもこのようなことが見られました（使徒 2:47）。

グループにおいては相互に関わることによって、個人が効果的に同化され弟子化されます。以前の確信が拡大されたり、変えられたりして新しい信仰の局面を発見していくには、自分の理解を自由に話し合える場が必要です。他のメンバーが何を信じ、それをどう適用しているかを聞くことによって、洞察を得られます。聖書に書かれている価値は、人間関係の中で学ばれなければなりません。

Ⅳ．グループの種類

さまざまな種類のスモールグループがありますが、３つの共通目的があります。(1) グループのメンバーのニーズに応える、（2）目的を達成する、（3）グループの関係を維持する。

スモールグループを分類するには、さまざまな基準があります。たとえば、組織のタイプ、内容、メンバーの種類、期間、メンバーの資格、場所、方法、大きさ、強調点、リーダーをたてる型、リーダーシップを分ける型、きっちりした雰囲気のもの、くだけた雰囲気のもの、メンバー固定制、メンバーが自由に入れ替われるもの、定期的、不定期的、深く関わる、浅く関わるなど。

１．コンタクトグループ

クリスチャンでない人たちと接点をつくる目的でおこないます。関係を深め、自分の信仰を形式的でなく伝えます。普通は自由参加です。リラックスして、会話をする雰囲気です。むずかしいキリスト教用語を使わず、一般的にキリスト教の勉強はしません。目標はくつろげる雰囲気の中で、信仰を分かち合うことです。

２．伝道グループ

福音を伝えるためのグループです。このグループに参加する人は、聖書やイエス・キリストについての話や、信仰の証しがあることをあらかじめ承知しています。しかし、主要な部分はオープンなディスカションです。クリスチャンでない人の質問やコメントによって話が進んでいきます。人間関係をつくることが強調されます。職業別に編成されることもあります。クリスチャンでない人のニーズに敏感に応えていくことが成功の秘訣です。

３．養育グループ

フォローアップグループと考える人もいます。新しくクリスチャンになった人や新しくメンバーになった人が、新しい歩みを理解できるように助けます。所属意識を高めることも目指します。普通は、決まった内容を扱い、特定の期間だけ存在します。

４．成長グループ

信徒が成長するためのグループです。たとえば、聖書理解、信仰を深める、交わりを深める、賜物・所有物を正しく管理する、互いに助け合うなど。この種のグループにはさまざまな名前がつけられます。たとえば、聖書研究、弟子グループ、交わり、カベナントグループ、祈りと分かち合いなど。共通の目的は、洞察や理解、真理の適用、研究方法、配慮、コミュニケーション、信頼を増すことなどです。定期的に集まり、メンバーは責任を持って出席することを期待されます。

５．サポートグループ

なんらかの共通点を持った人が集まります。たとえば、性別、年齢、職業、地域、経験など。共通の問題を解決することを目指します。実際的な質問を持ち、知ったことを実践します。同じような問題を共有し、同じ目標を目指すことにより、つながりが強まり、一人ではできなかったことができるようになります。たとえば、解雇、末期の病い、薬物依存、片親、高齢者、独身、看護師、弁護士、政治家、企業家、思春期の子を持つ親、離婚、虐待を受けた人、スポーツ選手、芸術家など。主に、関係づくり、分かち合い、ディスカション、祈り、聖書研究などが中心になります。

６．サービス／ミッショングループ

何かの奉仕をおこなうために集まるグループです。少なくとも一人のビジョンを持った人と、賛同する人から構成されます。たとえば、貧困救済、無学の人を教える、難民を助ける、未婚の母を助ける、高齢者を助ける、教会の施設管理、バザー、電話カウンセリングなど。

７．サテライト

小さな教会の集りのようなグループです。より親密な牧会がなされます。

Ⅴ．グループリーダーシップ

スモールグループミニストリーにおいて、もっとも重要なのはリーダーシップです。スモールグループには運行の責任を持つファシリテーター、複数のスモールグループがある場合には、それらを統括するコーディネーター、さらにそういった人たちを育てる人が必要です。

１．リーダーシップスタイル

専制型、民主型、放任型などに分類できます。どのスタイルにも長所と短所があります。最近注目されているのは、状況適応リーダーシップ（situational leadership）です。これは、グループの状況に応じてリーダーシップスタイルを変えます。①directing　グループが始まって、まだ方向性や動機づけができていない時。②coaching、③ supporting、④ delegating. （Ken Blanchard, Patricia Zigarmi, and Andrea Zigarmi, Leadership and the One Minute Manager , New York: William Morrow, 1985). これは、サーバントリーダーシップにも共通します。エペソ 4 : 16 から、キリストの体の中に神が置かれている潜在的リーダーを整え、育てます。グループのメンバーの興味と能力を敏感に感じ取り、一人一人が体全体を建て上げるために貢献できるように努めます。

２．リーダーシップシステム

グループは３つの基本的システムのいずれかに基づいて動いています。

①いつも決まった一人のリーダー

②分担されたリーダーシップ : 役割や責任が 2、3 人に分担されている。普通、ディスカションの触媒的リーダーと家庭的に感じさせる人間関係をつくるホスト／ホステス

③順番のリーダーシップ : 数人から全員が順番にリードします。

３．リーダーシップ機能

グループのタイプによって異なりますが、共通しているのは、課題と人に関心を払うことです。

①メンバー一人一人がグループに関わり、成長します。

②グループの目標を達成します。

③メンバーがグループとしていっしょに働くことができるようにします。

４．スモールグループミニストリーに必要なリーダーシップ

（規模が小さい場合は一人が複数の役割をかねる）

①スモールグループ牧師

プログラム全体を計画、実行、監督します。目的を考えます。教会内の意識を高めます。リーダーの養成をします。教会全体の働きの中で、他のプログラムとの調和を考えます。

②スモールグループコーディネーター

スモールグループの数が多くなってきた場合、各グループリーダーのケアをし、調整する働きが必要になります。励まし、問題解決、動機づけ、促進、グループ間のコミュニケーションと協力を円滑にします。５～８グループに一人いるとよいでしょう。

③スモールグループリーダー

信徒のリーダーが各々のグループミーティングを計画し、導きます。普通は、あらかじめ決められた構成や教材を与えられます。チームでおこなう場合は、グループですることを計画し導く内容を担当する人と、飲食物や人間関係を担当する人とでおこないます。その他の役割としては、イベントコーディネーター（リトリート、交わり会など)、プロジェクトコーディネーター、チャイルドケアコーディネーターなどがあります。

５．トレーニング方法

①トレーニングイベント

一回のワークショップまたはセミナー。「ディスカションの導き方」などといった特定のスキルに焦点をあてます。

②グループカンファレンス、リトリート

１日または週末をあてます。生きた関係をつくりながら、スキルやアイデアを発展させます。

③一定期間のクラス、コース

参加者が自分のグループで用いることのできる方法を学べると、もっとも効果的です。

④実践しながら学ぶ

実際のスモールグループ活動の中でメンタリングをおこないます。このトレーニングのためには、自分のやっていることとその理由を説明することができるリーダーが必要です。

⑤モデルグループ

モデルグループを観察したり、そのリーダーの模範に習います。説明とフィードバックが必要です。この方法は古いパターンを打ち破ったり、長期にわたりグループをより効果的にすることができます。

⑥自己学習

マニュアル、テープ、本などを用いて自分で学びます。継続して動機づけをしてくれる人が必要です。

⑦委員会

定期的に集まって、グループビルディングをおこないます。

⑧専門のコンサルタントを用いる、カンファレンスに出席する

専門家や経験ある実践者から学びます。そうすることによって、グループの興味が広げられます。得られた知識は自分たちの状況に適用できるようにする必要があります。ある程度の予算が必要です。

Ⅵ. グループダイナミックス

グループダイナミックスとは、グループ行動に関する研究分野です。集団力学と訳されることもあります。グループの行動は各個メンバーの行動の合計ではありません。グループは生きているシステムで、絶えず変化しています。このセクションで説明されている以外に、依存、独立、相互依存、親密度、所属感、自己イメージ、フィードバックなども関係のある要因です。グループの過程の研究と、パターンと原理を特定することによって、グループを意識的に変化、成長させることが可能になります。

１．自己開示とコミュニケーション

ありのままの自分を出すことは、恐れを伴うことです。しかし、自己開示をしないとグループのつ

ながりは築かれません。互いに知り合うことによって、信頼は築かれます。グループダイナミックスの中心は、安全な方法で自己開示できるように助けることです。

言語、非言語コミュニケーションは重要です。誰が誰に話し、何が聞かれたか、いかに情報や態度がコミュニケートされるか、内的反応を明らかにするどんなシグナルが与えられたかなどの要素が複雑に絡み合っています。何かを失う恐れを感じたり、自分が透明になって見透かされているように感じる時に、摩擦が起こりやすくなります。相手に同意しない自由があることは健全です。衝突に関しては、どのように衝突に気づくか、互いの違いを認め合いながらいかにして衝突を扱うかなどが重要になります。

２．規範（ノーム）と役割

規範とはグループのメンバーが守っている書かれていないルールのことです。普通、規範は破られるまで、表現されることはなく、目につきません。役割はグループのメンバーに期待される行動様式のことです。規範と役割はグループ内での勢力、信頼、ユーモア、決断、コミュニケーションのあり方を示します。

３．規模

グループサイズもグループダイナミックスに影響を与えます。たいていの場合は5人が理想的です。人数が増えるにしたがい、より機械的な情報提示になり、他人の視点に敏感でなくなり、より直接的に他人をコントロールしようとし、全員の賛成がなくても結論をだすようになります。

新しいメンバーが加わったり、いつものメンバーがいなくなると、グループダイナミックスが変わります。8 人以上の場合、黙ってしまうメンバーがでてきます。サイズが大きくなると、メンバーの発言に対しての応答が少なくなります。何人かのメンバーが他のメンバーをコントロールしようとします。リーダーがリーダーシップを持ちにくくなります。傷つきやすいメンバーが自分の感情や痛みを分かち合いにくくなります。グループ内にグループができたりします。

４．ステージ

どのグループも異なったスピードで進んでいきますが、同じ順序のステージを進んでいきます。自分のグループが今どのステージにあるのかを知ることで、リーダーは適切なリーダーシップスタイルを採用することができ、何をすべきかがわかります。代表的なステージを挙げます。

①オリエンテーション、参加をためらう時期

②一般的な不満と試みによる摩擦期。グループをどのようにするか、どの役割を誰がするかなどを決めていく。

③幸せな協力、生産期

④変化期。成長を続けるか、終わりに向かうか別れる時期。

５．　評価

メンバーが満足、不満足などをフィードバックしてくれることで、グループ内の評価ができます。健康なグループは定期的に診断し、何を続けるべきか、何を変えるべきかを評価します。評価は期間が終わり、次を始めるまでにおこなわれることが多いです。グループはダイナミックに生きているものなので、絶えず改善していくことが望まれます。評価はどのような結果であれ、「お祝い」という形

でなされるのがよいでしょう。以下の４つの点を分かち合いましょう。このことがメンバーに達成感を与え、締めくくりになります。

評価されるべき４つの領域

①目的：グループは目的を達成できたか

②内容：グループは何を学んだか

③グループプロセス：グループはどれくらいうまくいっしょにやれたか

④個人的成長：どのように各メンバーは変わり、成長したか

Ⅶ．スモールグループによる聖書研究

（参考：Willow Creek Community Church の Interactions シリーズ）

１．めざすもの

①深いレベルでの分かち合い

②アカウンタビリティー（互いに責任を負い合う）

③キリストに従う者として行動する、キリストに献身して従う者になる。

２．個人での準備

①祈りをもって始めます。聖書箇所を理解し、自分の人生に適用できるように神に助けを求めます。

②聖書箇所をよく読みます。

③よく準備してくると、グループでの学びが実りある時となります。

３．グループ

①今学んでいる聖書箇所に集中します。解答はその箇所から考えます。注解書や他の権威者が言ったことに基づいては考えません。

②グループの他のメンバーの発言を注意深く聞きます。できるだけ、肯定的に励まし合います。そうすると、引っ込みがちな人も参加できるように励まされます。

③話し合いで自分だけが話さないように注意します。すべてのメンバーが等しく分かち合えるように配慮します。

４．リーダー

①リーダー個人の準備として、まず自分で聖書箇所を理解し、自分の生活に適用します。これなくして、他のメンバーを導けません。

②メンバーのために祈ります。

③リーダーは講義をしません。

④メンバーが話し合いに参加できるように励まします。

５．セッション

①時間通り始めます。そうすれば、メンバーはその時間に集まるようになります。

②初めに、セッションは講義ではなく、話し合いであることを説明します。全員が参加できるように励まします。
③沈黙を恐れません。考える時間も必要です。
④リーダーが自分で質問に答えないようにします。必要な場合は質問を言い換えます。リーダーがしゃべり過ぎるとグループは消極的になります。
⑤どの質問にも複数の回答をだしてもらえるように励まします。「ほかの方はどう思いますか」「ほかにありませんか」などと尋ねます。
⑥可能な時はいつでも肯定的に対応します。その聖書箇所への洞察を分かち合ってくれたことを感謝します。
⑦解答を否定してはいけません。否定されたメンバーは、発言することを恐れるようになります。もし、明らかにまちがっていたら、「どの節からその結論がでましたか」と尋ねたり、他のメンバーに意見を聞くようにします。
⑧わき道へそれることはできるだけ避けます。もしそれた時は、やさしく今検討している箇所にもどします。
⑨祈りをもって終わります。学んだことを適用できるように神に求めます。
⑩時間どおりに終わります。

６．スモールグループのデザイン、７つの基本要素
①目的
　グループは何をするのか、何をしないのかをオープンに話し合って、一致しておくことは重要です。グループが何を達成したいかを言語化して、全員に伝えます。目的と異なった期待はスモールグループを崩壊に導きます。
②コミットメント
　グループメンバーに要求されるコミットメントのレベルを明確にしておきます。要求されることと責任を明確にしておきます。集まる回数、参加要件、グループは固定メンバーか出入り自由か、秘密保持について、互いに対する責任、場所、飲食物、リーダーシップ、グループ外で要求されること（宿題、リトリート、交わりなど)。
③サイズ
　グループのサイズは、目的、場所、費用、集まる頻度などによって決めます。たとえば、計画立案に全員参加、相互の責任が要求される深い交わりを期待する場合は、グループは小さいサイズになります。その反対に、特定のトピックを広く伝える、大きな違いを望む、計画立案に大勢の人が関わってほしい、必ずしもすべてのメンバーが参加しなくてよい場合は、サイズが大きくなります。グループサイズは自己認識、行動、メンバー間のコミュニケーションレベルに影響します。

７．配置
　空間と座る席の影響を考えます。近すぎたり、遠すぎたりすることは快適レベル、主題、分かち合いの仕方に影響を与えます。小さい部屋では人は離れて座り、広い部屋ではかたまって座る傾向があります。
　席の配置は単に物理的なことではなく心理的なことです。列、円、互いに向き合う、テーブルを囲むなどの配置は、人がどのように行動すべきかを暗黙に規定します。テーブルの隅や誰かの後ろに座

ることは、しばしば不参加のシグナルです。グループの端や真ん中に座る、リーダーとの位置関係は、その人がグループの中で果たす役割に影響します。

８．タイミング

集まりの頻度は、反応の良し悪しに影響します。頻度が高いほど、メンバーは互いに信頼し、オープンである傾向があります。

１回の時間の長さも影響を与えます。90 分以下の集まりは、結束が弱い傾向があります。食事を共にしたり、リトリートをしたり、いっしょに遊んだりするグループはまとまりが速くできます。

グループの継続の長さはグループの性質に影響を与えます。グループとして成長していくステージを通り、そのグループに特有の現象を生み出していきます。

９．リーダーシップスタイル

リーダーの役割、スタイル、性質、経験がよいグループになるかどうかに影響します。専制君主的で支配的なリーダーは、依存的か反抗的なグループを生み出します。そのグループは安心感を感じるかもしれませんが、メンバーが責任をとろうとはしません。リーダーのグループであるから、自分たちの権利をほとんど感じません。それゆえ、自分たちのもっとも内面の考えや感情を分かち合うことを躊躇します。

責任をとらない放任主義のリーダーは、フラストレーション、不安、無秩序、方向性がない感覚を生み出します。低い士気とコミットメントに苦しむことになります。

教祖的なリーダーの下では、不参加が生じます。自分を救い主、仲介者、住み込みカウンセラーと見てほしがるリーダーは、そういった役割に合うようにグループを条件づけます。

効果的なグループリーダーは、グループの成長やメンバーが自信とスキルを得るにつれて、リーダーシップスタイルを柔軟に変えていく必要があります。

10. 雰囲気、風土

リーダーとグループメンバーは、行動の有言、無言の基準を築くことによって、グループがどうなるのかを決めていきます。「ここでは意見は一致しなくていいんですよ」、「リーダーはいつも決まっています」などという言葉は、期待水準を表しています。

一つの主要な基準は、グループが「開いている(オープン)」か「閉じている(クローズド)」かです。開いているとは、新しい人がいつでも入ることができることです。閉じているとは、初めに参加した人に限定されることです。これらは、良くも悪くも影響を与えます。オープングループは、人がすぐに打ち解けますが、親しい分かち合いができる安定した関係を築くことはむずかしいです。クローズドグループは、長期の親しい関係を築くことに適していますが、排他的になりがちです。内容中心グループは、オープングループが向いており、関係を重視するグループは、メンバーを固定することが適しています

クローズドグループはしばしば、少人数で高い出席率になります。オープングループは、出席率にばらつきがでやすいです。オープンかクローズドかは、グループの目的によって決められます。多くの人が最初の数週間はオープンを好み、いったんメンバーが定まったらクローズドにすることを好みます。

＜ 文 献 ＞

尾谷ショーン、2007、『日本の教会のためのスモールグループ入門』マカリオス。さまざまな形のスモールグループについて、実践的な内容になっている。

クラウド、ヘンリー、ジョン・タウンゼント（＝2005、中村佐知、中村昇訳『スモールグループから始めよう！―人生を変える恵みと真理の実践―』地引網出版）。聖書に基づいた実用的な本。霊的成長のあり方の参考になる。お薦め。第１部、第３部を最初に読むとよい。網羅的で説明が長い。構造化されていない。日本文化の中で実りある「対決」がどこまで可能か？

クンツ、M. ＆ C.シェル （＝1998、聖書を読む会訳 『聖書を読む会の始め方』）。

斯波光正、1997、『恵みあふれる教会をめざして―セルグループ教会のハンドブック―』小牧者出版。

スナイダー、H.（＝ 後藤敏夫・大島久美訳『小さいことはすばらしい―スモール・グループ聖書研究の祝福―』CS 成長センター）。

ビル・ドナヒュー、ラス・ロビンソン（＝2004、松本徳子訳『小グループで教会は変わる』福音社）。スモール･グループより成る教会について語る。理論の部分はすべての教会に適用できる。全体的に大教会向け。少々、機械的過ぎる感じがする。もっと要点をまとめて書いて欲しい。

ヘステネス、R.（＝2014、朴憲郁、上田好春訳『グループで聖書を学ぶ ABC』日本キリスト教団出版局）。おそらく日本語で書かれたもっともまとまったスモールグループ聖書研究の手引書。

毛利陽子、2001、『ホンネで話せるグループづくり』小牧者出版。

ネイバー、ラルフ W. （＝1998、酒井敬仁・南原リツ子・南原チヨ訳『セル教会ガイドブック』マルコーシュ・パブリケーション）。スモールグループについてではなく、セル教会について書かれている。参考になる部分もある。あまりよくまとまっていない。

石原良人、2003、『セル教会の本質と実際 ―より初代教会に近づきたい―』JCMN 出版。